野球やろうぜ

いいくに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
野球やろうぜ

【Ｎコード】
Ｎ６４９１Ｉ

【作者名】
いいくに

【あらすじ】
一生懸命に野球をするやつらの野球にかけた物語。

高校合格！！

「野球やろうぜ」

この言葉からオレの野球は始まった。

「０３２０……あった、あった！！」

周りで泣いてるやつもいる中、一人はしゃいでいるやつがいた。

「やりやした～合格しやした～！！」

いや…二人だった…

この二人は周りから見てもわかるくらいはしゃいでいた。

「やった～！！」

何故か周りもそれにつられてはしゃぎだす。

「やった～やりました！！

鏡　京一やりました！！」

自己紹介するかのように叫ぶ。

京一は親父に頭を殴られて引きづられていった。

「母さん京一やったよ、あの頭で公立高校行けたんだ…

アイツ頑張ったよ…」

京一の親父は体を震わせ大粒の涙を流していた。

「泣くなよ、みっともない」

親父の頭をたたきながら言う。

「叩くな、親父を」

親父はゆっくり立ち上がり部屋から出て行った。

京一は完璧に親父が出たのを確認して写真の母親に告げた。

「オレ受かったぞ、また野球できるんだ次はレギュラーになって見せるから

……あと県外だから家出るんだ

まぁ元気にやってくよ」

ゆっくりと立ち上がり自分の部屋に戻って行った。

一年の実力…

入学式当日

「ん～ダルかった～」

京一は誰もいない廊下を背筋を伸ばしながら歩いていた。
入学式が終わりみんな校門を通って帰っていた。

「早く野球やりたいな～」

窓からグランドを見て言った。
しかしグランドで野球部は二人しかいなかった。

「二人だけ？」
「そうみたいで」
「ふ～ん……うぉ！？」

京一の隣には知らないやつがいた。
京一よりちょっと小さい眼鏡かけた男だ。

「野球部を見てるってことは、野球部に入るんでやしょう」

眼鏡の男がきいてくる。

「そうだけど……なんでそんな喋り方なの？」
「親父がヤクザで喋り方がうつったんでこぜぇやす」

眼鏡の男は人情劇みたいな感じで喋っていた。

「アッシは八田　太郎でやす」

「オレ鏡　京一
ヨロシク」

京一は手を差し延べた。
八田はしっかり握手をした。

「ヨロシクおねげぇしやす」

二人は窓から部活を眺めていた。

二週間後

この日は入部届けを出して正式に部活を始める日。

グランドには先輩一人とマネージャーが立っていた。
そして、十五人の新入部員が並んでいた。

「今日から部活が始まる
まず副部長のオレから挨拶する
今日は部長の山田が不在でな
オレは柿崎よろしく頼む以上」

身体が大きくいかにも堅物っていう感じのする男だった。

「それでは一年生にも一人ずつ挨拶してください」

マネージャーが指示をだす。

指示通り端から順番に挨拶を始めた。
そして京一の番になった。

「鏡　京一です
ポジションは一応全てできます
よろしくお願いします」

京一は軽く礼した。
八田も挨拶をしたが、緊張でまともに喋れていなかった。
最後によく見えないが、小柄なやつが挨拶を始めた。

「桂木　緑です
投手です
よろしくお願いします」

声も高く男という感じがしなかった。
周りからも女じゃないかと言う声があがっていた。

「あれは女でやすな」

八田はにんまり笑って言った。

「まぁ女の子でも野球がやりたいならいんじゃないかな」

緑は周りの声が聞こえたのか下を向いていた。

「では早速みんなには……」
「ワリィ遅れた〜」

たぶん主将の山田と思われるやつが走って来た。

「野球のテストをしてもらう」

柿崎は気にせず続ける。

山田は隅っこで着替え始めた。

「まずは、アップをかねて走ってもらう

校門出てまっすぐ行くと橋があるその橋まで行って戻って来い」

みんな一斉に走り始めた。

京一はその場で軽くストレッチしてから走り出した。

「それでお前はどうだったんだ？」

柿崎はユニフォームに着替え終わった山田に聞いた。

「いや～大丈夫だけど

先発は無理だってさ」

山田は明るく答えた。

そんな山田を見てちょっと心がいたくなる。

「で…一年の様子はどうだ？」

山田はゆっくりストレッチをしながら聞いた。

「3人は確実に力になるはずだ…」

「3人か……」

二人はグランドでアップを始めた。
一年はひたすら走っていた。
十分は走っただろうか、橋は全然見えてこない。
「全然見えないでありんすな」
八田は京一に聞いた。
「まぁ走ってればつくんじゃない」
笑いながら答える京一。
「あとなんでずっと最後尾でやすか？」
八田はペースをあげたそうに京一に言った。
「最後にスパートするからいんだよ」
「そうでやりんすか
んじゃオイラは先に行きやす」
八田はペースを上げ京一を置いて行った。
しかし、京一はペースを変えることはなかった。
そのまま走り続けて行くと、女の子が集団から下がって来た。
「緑ちゃんだっけ？
どうしたの？」

「ただ…ペースを…落としただけです」
緑は息切れがヒドくもうギリギリな感じがしていた。
京一はそれをさっして喋ることをやめた。
二人はドンドン集団から離されて行った。

「ハァハァ…」
緑はギリギリの状態だった。
流石の京一も息が切れはじめた。
緑は歩きよりも遅かった。
ただ気力だけで走ってる緑に京一は気を配っていた。

「京一く〜ん！」
「あっ…八田くん」

向こう側から八田が走って来た。

「向こうすぐに橋がありんすよ」

「ありがとう」

すれ違いざまに会話をする二人。
京一は前を向きペースをあげようとしたが緑が気になってあげれなかった。

「ペース…あげれば…いいじゃ…ないですか…
気を…使われる…のは…大嫌い…です」

緑は目に涙をためて言った。
とても悔しかったのだろう。
「…そっか、んじゃ先に行って待ってるから…」
京一はペースを上げていった。
緑は京一の見えなくなる背中を見ていた。
「やった～ついたでありんす」
八田はグランドに寝そべりながら言った。
「早かったね～」
山田は素振りをやめて八田に言った。
柿崎は気にせず素振りをしていた。
それから続々と一年が帰って来た。
「あと二人か…」
柿崎は人数を数え、次の練習の準備をはじめた。
「ふ～……」
緑がゆっくりと帰って来た。
「お疲れ様～」

山田がタオルを緑に渡した。
「もう一人は？」
「まだ…来てないんですか？」
緑は驚いたように山田に聞いた。
「来てないよ
はて…困ったな
みんな来ないと次行けないぞ」
「すいませ～ん遅れました～」
京一が走りながらやって来た。
「なんでこんなに遅いんだ？」
「橋がなかったんすよ
んでおじちゃんに聞いたらかなり前に通り過ぎたらしくて…」
京一は照れながら事情を説明した。
「……そうか、わかった」
柿崎が集合をかけ、各希望ポジションにつかせた。
「おっ…ピッチャー希望か…」
「はいお願いします」

緑はマウンドで守備の体制で構えていた。

「行くぞ」

……

……

……

守備練が終わりバッティング練習に移った。

「緑お前が投げろ」

「はい」

緑がマウンドに上がり、防具をつけた柿崎とサインを決めていた。

「緑ちゃんどんな球なげるんでやしょう？」

「わかんないよ

だからちょっと楽しみなんだ」

八田がセンター、京一がライトで会話をしていた。

レフトに一人スゴく大きい男がいた。

外野はこの3人だけで、

残りは全員内野希望でキャチャーが誰もいないピッチャーも緑だけである。

「よし行くぞ」

と言って、柿崎がマスクをして座り山田が打席に立った。

「思い切り来いよ」

無邪気に笑いながらバットを構え、投球練習をマジな顔して見つめる。

「しまってけよ〜」

キャチャーのセリフを奪い山田が守備に言う。

緑が柿崎からボールをもらいゆっくり投球動作に入る。

綺麗なフォームのオーバースローからボールが放たれる。

「おっそ…」

パスッ

ミットに軽い音をたて、収まる。

「ワンストライク」

緑はボールを受け取り深呼吸をする。

「かなり遅かったでやりんすね」

「でも確実にリード通りに投げてた」
緑は深呼吸をして投球動作に入る。
さっきと同じく綺麗なフォームで球を放つ。
バシッ
外角ギリギリに決まる。
「さっきより早かったな」
山田がメットをかぶり直す。
次は高めにストレートを外す。
カウント・ツーワン
緑はさっきと同じく高めの外れたところに放つ。
「またか…」
山田の予測とは裏腹に球はお辞儀をするようにスルリと低めギリギリのストライクゾーンをかすめて行った。
「三振だな」
「まだ一回も降ってねぇよ」
「……わざとだろ？」
「さぁな」
山田はメットを外してグラブを持ちセンターに走った。

「センターのやつ打て
さっきのランニング早くついた順に打ってけ」
「はいわかりやした！」
八田と二番目のやつが走って打ちに行く。
「八田くんか…」
京一はちょっと前進守備をとった。
「お願いしやす」
八田が打席に入り構える。
見るからに打つ気満々だ。
緑が外角ギリギリを攻める。
八田は見逃す。
結局カウント・ツーツーになった。
八田はまだバットを振らない。
5球目高めるから低めギリギリに落ちる球。
待っていたかのように八田のフルスイング。
ブンッ
パスッ
球とバットの差は1メートル近くあった。
「バッティングはダメダメか…」

山田は残念そうに呟いた。
誰も緑からヒットを打つことができずについに緑を除いてあと二人になった。
「お願いします…」
レフトの大柄な男が打席に立つ。
構えには力みがなく、迫力も感じられない。
一球目緑から放たれる遅い球。
カキン！！
ガシャン！
「ファール」
レフトのフェンス直撃のライナー。
「なかなか面白いな…」
山田は男のバッティングを見て微笑んだ。
カキン！！
ガシャン！
又も遅い球を引っ張りファール。

追い込んでからの三球目。
高めから落ちる球。

ガキン！！

多少詰まって音が響き、球は力なく高く上がる。

「オーライ！」

ショートが下がりながら声をかける。
しかし打球はなかなか落ちて来ない。

センター付近まで来ても落ちて来ない。

「あとは任せます」

センターに託したが山田は動かない。

「フライ行ってますよ」
「いやこれは入るだろ」

山田は打球を見上げて言った。

ドン！

フェンスの向こうの草むらに落ちる。

みんなシーンとしていた。
球の滞空時間の長さは異常なものだった。

「ナイスバッティング！！
お前さ名前は？」
山田が男に聞く。
「……っす…」
小さくて声が外野まで届かない。
京一は聞き取れなかった。
「村井だな！わかった！」
みんな又も声を失った。村井のバッティングもだが山田の聴力にも驚かされた。
京一はネクストで唖然としていた。
「次早くしろ」
柿崎に言われて京一は右打席に入った。
「お願いします」
礼をしてバットを構える。
バットをねかせて肩の近くにヘッドが来ている。
一球目
緑のストレートが低めに決まる。
「スゲ～なコントロール」

二球目
遅い球を思い切り空振り。
「あら？」
三球目
外角に外れてボール。
四球目
真ん中に打ちごろの球。
京一はスイング止める。
球は沈みワンバウンドしてミットに入る。
「いい目してるな」
山田は嬉しそうにセンターで構える。
五球目
内角高めギリギリにストレート。
パキン！
三遊間に鋭いライナーが飛ぶ。
レフトとセンターが左中間に走る。
バシッ！
ショートがダイビングしながら球をつかむ。

「アウトだ」
膝を払いながら言う。
「お～一年はスゲ～やつが多いな」
山田はセンターからグランドを見回して呟いた。
「よ～し今日の練習はこれで終わり」
山田はそう言うとサッサと家に帰ってしまった。
柿崎はゆっくりストレッチをしている。
「疲れたやす」
八田は眼鏡が曇るくらい汗をかいていた。
「大丈夫？」
「平気でやす
それじゃお先に失礼いたしやす」
八田はスゴい速さで帰って行った。
京一はゾロゾロと帰ってく一年生を見ていた。
「……ったく」
京一は一年が帰ってく中、道具片付けを始めた。
「手伝うよ」

緑がベースを運びながら言う。

「ありがとう」

「まぁボクだけじゃないけど」

村井が一気にバット全部を肩に担いで来た。

二人のおかげで早めに片付いた。

三人は話しをしながら歩いてグランドのほうに歩いていた。

「ちょっと来てくれ〜」

グランドから声がする。

「この声は…太田だな」

「誰だよ？」

「京一くんのライナーとった人じゃない？」

「そいつだよ」

三人は太田のところへ走った。

太田は何かを探してるようだった。

「オレのバンダナがねぇんだよ

知らねえか？」

太田は焦っていて落ち着きがなかった。

村井がバンダナをポケットから出し太田に渡す。

「あっ…ありがとう
よかった〜」

「バットに挟まってた…」

村井は照れくさそうに言うと帰り支度を始めた。
それを見て京一たちも帰り支度を始める。

京一は飯を食べ終わり、グラブの手入れをしていた。

「高校ではレギュラー取るぞ」

楽しそうにグラブを手入れし、一つし終わると今度はファーストミットの手入れを始めた。

部屋にはまだ三つのこれから手入れするグラブが残っていた。

練習試合！！

今日の部活はミーティングから始まった。

「一週間後のゴールデンウィークの最終日に練習試合をすることになった」

山田が真面目な口調で言う。

「どことやるんですか？」

緑が手を上げて聞く。

「え～と…どこだっけ？」

柿崎に聞く山田。

柿崎はため息を一つして答える。

「両国高校だ！」

両国高校は去年の甲子園の準優勝した高校だ。

「マジか…」

部員がざわつきだした。

山田はざわつきを止めるように大きな声で言う。

「今のウチの状況では勝てるかわからないが、胸を借りるつもりで行くぞ！……」

なんて言わん！やるからには勝つぞ！！」

山田の目は真剣そのものだった。

みんな声をかけて練習を始める。
野球部は目標ができてそれとなく形になって来た。

アップも終わり、ノックに入ろうとしていた。

「村井お前今日からファーストな」
「…うぃっす…」

村井はファーストのやつからミットを借りてながらノックを受けることになった。

「鏡〜！！お前キャチャー！
柿崎お前ライトな」

「えっ？」
「おう」

柿崎はすぐにライトにまわったが、京一はホームまで来たが不安が顔に出ていた。

「お前ミットあるか？」
「一応ありますけど…」
「…心配すんな
なるようになっから

ほら早く準備しろ」
「はい」

京一はミットを持ち出し不安はあるが、やるしかないっと覚悟を決めた。

そうして両国高校との対戦の日を向えた。

「よ～しみんな集まったな
試合はこのメンバーで行くぞ」

努力高校
順守打投
1遊左右　太田
2中右右　八田
3左右右　山田
4一右左　村井
5右右右　柿崎
6捕右右　鏡
7三左右　高岡
8二左右　和田
9投左左　緑

「両国か…緊張すんな…」

「やることは変わらないだろ…」

高岡と和田は緊張した様子で話していた。
二人とも中学では四番を打っていた。
しかし、高校では周りが大きく見えてしょうがなかった。
いきなり両国高校が相手でスタメン。
そのプレッシャーは大きいものだった。

「相手はなんでもない普通の公立校だ
ただあの二人さえ気をつければいい」

両国高校の主将の富田がみんなに声をかける。

「まぁいつも通りやればいい」

監督の山田がサラッと言う。

レギュラー陣は素振りやキャッチボールをして試合に供える。

「弥佳準備しておけ」

山田監督が選手に声をかける。

「はい」

静かに返事をしてランニングを始めた。

「行くぞ！」

お〜！！努力高校野球部がグランドに整列する。

「勝つぞ！！」

しゃ〜！！両国高校も負けじと声をだす。

「これから練習試合を始めます
礼！！」

両校礼をして努力高校が守備につく。
そして緑が投球練習を始める。

「おっそ……」
「楽勝じゃね」

両国高校からそんな声が聞こえる。
緑は気にせず投球練習をする。

「しまって行こうぜ！！」

一番バッターが左打席に入る。

京一がサインを送る。
うなずき一つ深呼吸をして振りかぶる緑。

バッターはグッと脇を締めて構える。
緑が試合開始の一球を投げる。

「さっきより……」

ベンチで見ていた富田が呟いた。

パスッ

力ない音がしてミットに収まる。

ストライク！！

審判が大きな声で叫ぶ。

二球目

ストレートを外角に外すが空振ってストライク。

三、四球目は外れて

2ー2

五球目

高めから落ちる球。

思い切り振って空振り三振。

二番、三番も三振に取りチェンジ。

「よし！攻めてくぞ」

太田が打席に入る。

軽く二、三回素振りをして構える。

ピッチャーが一球目を投げる。

バン！！

気持ちいい音がグランドに響く。
音が消えたころ、努力高校のベンチはざわついていた。

「速い…」
「緑の倍くらいあんじゃねぇか？」
「……」

村井が立ち上がり奥で素振りを始めた。
山田も立ち上がりメットをかぶり準備する。
「お～スゲ～な～」

太田は子供のようにはしゃいでいた。

「三振はとれなぇなこの球じゃ…」

振りかぶり、外角からボールに逃げるシュートを見逃す。

三球目
ストレートが高めに放たれる。

カキン！

センター前に抜ける鋭いあたりが飛ぶ。

ノーアウト一塁。

八田はバントの構えをするがかすることもなく三振。

三番山田が打席に立つ。

一球目

「……！！っうぉ！」

山田の頭に球が来たが、のけ反ってかわす。

「あぶねぇな…」

二球目

スライダーが低めギリギリに決まる。

山田は打つ気配がない。

サードの富田が山田の様子を伺う。

四球目

ストレートをが内角に放つ。

山田はサードにセーフティーバント。

「……げっ！」

富田が山田の動きを呼んで前に来ていた。

「ゲッツー！」

キャッチャーが叫ぶ。

しかし、富田はファーストに投げる。

キャッチャーがセカンドを見ると、太田が既に到達していた。

「周りの状況をちゃんと見ろ」

「はい！！」

このチームは富田を中心にまわっているようだ。

村井に打順が周った。

両国高校は身長が高い選手が多いが、村井ほど大きな選手はいなかった。

キャッチャーがマウンドに向かう。

「次は柿崎だ

こいつで終わらせるぞ」

「あぁ」

キャッチャーは戻り、マウンドでロジンを触り、セットポジションからの一球目

内角にストレート。

キン！

ちょっと詰まった音がグランドに響く。

「センター！」

打球はピッチャーの頭を抜けて、センターに向かう。

センターは下がる。

ガシャン！！
フェンスダイレクトのタイムリヒット。
「足おそ…」
村井の足はものスゴく遅かった。
しかし、努力高校一点先制。
五番柿崎を迎える。
一、二球とも外して
０ー１
三球目
外角にストレート。
柿崎は振りはじめる。
バットと球が当たる直前に球がシュートした。
バシッ！
「くっ……」
四球目
柿崎はシュートに狙いを定めて振りに行く。
球は変化することなく、詰まる形でバットに当たった。

ガキッ！

高いフライがレフトに上がる。

レフトは下がり、気付いたらフェンス際にいた。

ドン！

「……」

グランドが静まる中、審判が手を回す。

ツーランホームラン！！

３対０

努力高校ベンチが盛り上がる。

両国高校は内野がマウンドに集まる。

「いつも通りやればいんだ

相手が誰だろうと常に全力で行くぞ！！」

おう！！

内野が散らばる。

ピッチャーはさっきとは違う雰囲気がある。

「おっ……立ち直ったか…」
山田はベンチで苦笑いを浮かべた。
京一が打席にたち軽く素振りをする。
（畳み掛けるならいまだ）
ピッチャー振りかぶって一球目
真ん中に速い球。
失投を振りに行く京一。
ブンッ！
バシッ！
バットに当たることなくミットに収まる。
（スライダーか…
見極めが悪かったな…）
二球目
快速球が低めに決まる。
京一は振ることが出来なかった。
「あれは…飲まれたな…」
柿崎が守備の準備をしながら呟く。
三球目
内に食い込むシュートが外れる。

四球目
高めのボール球を振って空振り三振。
「すいませんでした…」
「気にしないで行きましょう」
緑がミットを渡して走って行く。
「そゆうこと」
「行くでやりんすよ」
みんな守備につく。
「……よし！」
京一も気合いを入れ直す。
両校ヒットは出るが無得点が続き、五回表。
両国高校４番淀川。
「ハァハァ…」
緑の疲労は目に見えていた。
一球目
スローボールを低めに決まる。

（この遅さは待ち切れないよな…）

二球目
ストレートが内角高めに決まる。

（そして、この緩急とコントロールか…
打ちにくい訳だ…）

三球目
大きく外れてバックネットにぶつかる。

「タイムお願いします…」

京一は思わずタイムを取る。

「大丈夫か？」
「全…然…平気だよ…」

笑って見せる緑。
無理をしてることは見え見えだった。
京一は手を差し出す。

「思い切り握って見てよ」
「いや…大丈…夫だから…」

京一はいつになく真面目な顔をして、
「いいから」
と言った。

緑は京一の手を思い切り握った。

「……よしこの回おさえるぞ」

「えっ……うん！」

緑の手に力は一切入らない状態だった。

京一は緑の根性にかけた。

四球目

真中から落ちるカーブ。

カッ！

バックネットに飛んでファール。

五球目

外角低めにストレート。

カキン！！

「ショート！」

太田が全力で横に飛ぶ。

バチッ！

グラブを弾いてレフト前に転がった。

ノーアウト一塁。

そして五番の富田を迎える。

「ハァハァ…」
緑はどうやったら押さえられるか考えていた。
「……ド！！緑！！セカンド！！」
ハッとしてセカンドに投げる。
セーフ！
「あっ……」
緑は肩を落とした。
「気にすんな！バッター勝負！」
京一が声をかける。
しかし、緑は引きずった様子だった。
富田を迎え、最小失点で押さえたいところ。
富田に対して
一球目
真ん中からのカーブが思ったよりも変化せず快音が響いた。
3対2
みんながマウンドに集まる。
「もう限界だな〜

よく頑張ったよ
次誰投げる？」

山田が明るく言う。

「決めてないのか！？」
「どうすんすか！？」

柿崎と京一は驚く。

ベンチから一人の部員が走って来た。

「なにがあったんすか？」
「お～松木
お前ピッチャー出来るか？」
「えっ……一応出来ますけど…」

「ヨッシャ～
ピッチャー交代」

山田は審判に交代を告げる。

肩で息をしながらベンチに下がって行った。

松木がマウンドで投球練習をはじめる。

右のサイドスローから投げる球は肩は温まってないが１２５キロは出ていた。

投球練習が終わり
六番が打席に立つ。

一球目
内角にストレート。

松木も緑ほどではないがコントロールはよかった。

二球目
真ん中に失投

ガキッ！

と終われた球は手元で変化した。

結果はピッチャーゴロ。

「どうしたんだよ…
真ん中だったぞ」
「手元で変化したんだよ」
「ツーシームだな」

富田がベンチ全員に聞こえるように言う。

（あのピッチャー…どこかで…）

山田監督は記憶の中で松木という選手を探していた。

七番、八番をセンターフライ、ファーストゴロに打ち取った。

松木の登場でどちらも追加点を得れずに、回は八回表バッター八番。

一球目を引っ張り、
ファーストライナー。

九番
三球三振。

そしてまた一番に戻った。

一、二球目
打ちに来る気配もなく見逃す。

三球目
ツーシームを外角に鋭く放たれる。

カンッ

三塁線ギリギリに転がる。

高岡がダッシュして球をつかむ。

「投げるな！」

京一は高岡に指示するが投げてしまった。

「……」

村井がジャンプするが、それでも届かない。

「……ちっ」

ライトがカバーに入ってる間にバッターランナーはセカンドに行く。

「ドンマイ気にしないで行こう！」

京一が声をかけるが、こんなミスは伝染するものである。

二番

初球を叩いてセンター前に抜ける。

しかし当たりが良すぎてランナーは帰って来れなかった。

三番

一球目

ツーシームを引っ掛けてセカンドゴロ。

「ヨッシャ！……あっ！！」

和田はトンネルして、ボールが右中間を転々と転がって行った。

ファーストランナーもかえるタイムリーエラーとなってしまった。

３対４

淀川を三振にとって八回表終了。

努力高校は先程までの明るい雰囲気は無くなっていた。

努力高校の攻撃。

一番太田から。

「声出して行こうぜ！」

太田がベンチに声をかけて打席に向かう。

「打ってこうぜ！」

京一は太田に言う。

その初球

カキン！！

センター深くに飛んで行く。

ファーストベースを踏んでセカンドに回って行く。

バシッ！！

高く上がり過ぎて伸びがなかった。

「ワリィ…」

しょんぼりしてかえっくる太田。

「いやいやナイスバッティング」

見たことないオジサンが手を叩いて向えた。

「……誰？」

「監督！」

柿崎が驚く。

監督が顔を前で手をあわせて謝る。

「遅れて来過ぎてやりんす」

八田が言う。

「あれ八田バッターは？」

「三振でやんす」

自慢気に言う。

「ってことはオレか…」

山田がメットをかぶってバットを持って打席に向かう。

「山田だ～シュートな」

後ろを向いて手を上げて打席に立つ。

一、二球目は外角にストレートが決まる。

２－０

三球目

外角から食い込むシュート。

カキン！！

ガン！

フェンスにダイレクトでぶつかる。

ツーアウト二塁

四番村井にチャンスで回って来た。

一球目
ストレートが外角のあまいところ入る。
ストレートも速度が落ちて来ていた。

二球目
スライダーがスポッ抜け、
カキン！！

鋭くライト前に抜ける。

山田はサードを蹴るフリをして止まる。
ツーアウト一、三塁。

「柿崎か…」

一点差で柿崎は両国高校にとって恐怖である。

「思い切り行こうぜ！！」

キャッチャーが声をかけるが、腕が縮こまってしまって制球が定まらず一球も入ることなく四球で満塁になってしまった。

「ピッチャー交代！」

山田監督がベンチから出て告げる。
代わりに出て来たのは女の子だった。

「弥佳頼むぞ」
「はい」

弥佳が軽くマウンドをならして八回ツーアウト。
勝敗をかけたチャンスが始まった。

試合終了

パスッと情けない音でミットに収まる。

「打てそうでやりんすね」

八田が京一の肩を叩きながら言う。

後ろから松木が八田の頭を叩く。

「速さは関係ないやろ

打ちにくいフォームしとるやろ」

弥佳の変則なアンダースローはタイミングを取りにくそうだった。

「まぁ全力で行って来い」

監督が京一に声をかける。

「はい！」

大きく返事をして打席向かう。

両国高校のバッテリーはマウンドでサインを決めていた。

「げっ…サインそんなにあんのかよ…」

「ぜんぜん多くないです

覚えてください」

「…おう」

キャッチャーは頭をかきながら戻って行った。

プレイ！

審判が声をはる。

「……ふ～」

京一は大きく息を吹いて打席に立つ。

「クスッ」

弥佳は笑ってる口元を帽子で隠す。

キャッチャーがサインを出す。

弥佳はうなずいてセットポジションから一球目を投げる。

球は京一の頭目掛けて飛んで来た。

「……危っ！！」

バシッ！

「……ックス」

ストライク！

京一が避けようと後ろに体を倒したとき、鋭く球がカーブし、内角高めに決まった。

「……スゲ～」

京一の一言で笑っていた弥佳が喋りだした。

「でしょ！なんで私がエースじゃないか
私もわからないのよ！！」

一人でペラペラ喋りだす。
山田監督はベンチで頭を抱えていた。

「静かならいい投手なんだがな…
あの性格はな…」

「……スゲ～」

京一の一言で笑っていた弥佳が喋りだした。

「でしょ！なんで私がエースじゃないか
私もわからないのよ！！」

一人でマウンドの上で自分のことを語っている。
山田監督はベンチで頭を抱えていた。

「静かならいい投手なんだがな…
あの性格はな…」

弥佳はロジンを触って、大きく息を吐く。

「エースは私だってことを証明する！」

京一は尻についた砂を払ってバットを構える。
その姿を見て、弥佳から笑顔が消える。
そして、変則的なフォームから二球目を投げる。
寸分のくるいもなくど真ん中に球が投げられた。
京一は思い切り踏み込みそれを引っ張たいたーはずだった……
ブン！！
バスッ！
外角低めに一杯にカーブが決まる。
「すごいね～切れが」
努力高校ベンチで監督が嬉しそうに笑っていた。
三球目
真ん中に球が投げられた。
カーブと読んでいた京一とは逆にシンカーで食い込んで来る。
カキン！！
打球はレフトのポール際残り５ｃｍのところで切れて行く。
「……クス」
弥佳はまた笑った。
しかしさっきまでのバカにしたような笑いではなく勝負を楽しんで

いるような笑いだった。

そして四球目
外角のストレートを京一は思い切り踏み込み打ちに行った。
しかし球は真横にスライドした。
京一は体制を崩しながらも打ちに行った。

カキン！！！！

バシッ！

アウト！
ゲームセット。

「いや～いい試合だった」

監督が明るく言う。
部員たちは道具を片付けながら監督の言葉を聞いていた。

「さ～て帰って反省会だな」

山田が部員みんなに言う。

「え～でやりんす」

八田は不満そうにシブシブ反省会に出ると言っていた。

「こんな事じゃ甲子園にすら行けないぞ！」

両国高校は山田監督が喝をいれていた。

「富田これからどうする？」

「常に１００パーセントの力をだせるように各自の精神面、実力ともに上げていきたいと思います」

山田監督と富田はこれからの目標を決めて部の士気を高める。

反省会が終わりダウンを始め、山田監督は一人ベンチで今日の試合を振り返っていた。

……

……

…

八回裏ツーアウト満塁２－０からの四球目。

カキン！！！

ライトに打球がまっすぐ飛んで行く。

「ライト～下がれ！！」

ライトは前に出かけたがその声を聞いて下がる。

打球はちょっと低いが落ちることなくまっすぐ伸びて行く。

「ＯＫ！」

ライトはフェンスにくっついてアウトを確信する。

「オーライ！！オーラ……」
「やられたな～……」
弥佳呟き、帽子を脱いだ。
打球はライトの頭を超えフェンスを超える。
「……っしゃあ！！」
努力高校ベンチは歓喜のこえで一杯だ。
「京一！！」
「やったでやりんす！」
「すごいね～」

バッターアウト！！
審判の声が響いた。
努力高校の部員は帰りのバスで寝ていた。
「あ～疲れたでやりんす～」
八田はポテトチップスを食べながら言った。
「ホンマやで」
松木もタコ焼きを頬張りながら言った。
緑も呆れながらぼーっと反対側の窓から外を眺めていた。

「落ち込むなよ」

肩落とす和田、高岡、京一の頭を叩いく山田。

「オレのエラーで…」
「オレが打てば…」

山田は大きくため息をして、頭を叩いた。

「まぁいいや」

そう言うと山田は寝入ってしまった。
バス内は静かで山田のイビキだけが聞こえている。
みんな疲れた体を少しでも休めようとしていた。
そんな中で京一は最後の場面の事を思い出した。

予想外の球、そして打席から足を出して打ち、違反打撃になりチャンスを逃す。

「……悔しいな……」

誰にも聞こえない声でボソッと呟いた。

夏へ向けて

「父さん今度大会があるんだ見に来てよ」
「悪いな…仕事が急がしんだ…」
父さんはいつも試合を見に来てくれたことはなかった。

ゴールデンウィークの練習試合が終わり、夏の大会に向けて練習が始まった。

バシッ

「松木～調子いいじゃん」

山田がネット越しで投球練習してる松木に声をかける。

「でも変化球が寂しいなツーシームとシュートだけじゃな～」

頭をかきながら言う。

「カーブとか投げれない？」
「無理っす」

即答し肘を触る。

「昔に肘やってしもうたのです」
「そうなのか…」

山田は黙ってしまった。
そこに緑がやって来た。
「松木くん、そろそろ投球練習変わってよ」
山田は緑を見て大きく目を見開いた。
「いたじゃんカーブのスペシャリストが！！」
「へ？……」
緑はキョトンとしていた。

「コイツなら肘に負担なくカーブ投げれるだろ教えてもらえよんじゃな～」
山田は自分の練習に戻って行った。
二人はキョトンとしていた。
京一はミットを叩きながら二人に声をかけた。
「早くしろよ～」
その声で松木は恥ずかしそうに
「あの～…カーブ投げ方教えてくれへん…」
と言った。

十分後……
パスッ

「オォ～曲がった！」
「ホンマすごいな！お前！」

京一と松木は驚いた。
緑は照れたように頭をかいていた。

「わいスゲ～！！」

松木はマウンドの上ではしゃいでいた。
緑が隣で拍手をして笑っていた。

「松木！ピッチャーやりに来い！！」

柿崎が松木を呼ぶ。
松木は大きく返事をして、マウンドに走って行った。

「急がしい人だな…」

緑はポカーンとしていた。
京一は緑のところに向かった。

「どうしたの？」
「……」
「緑ちゃん！」
「……あ…なに？」

緑は覇気のない声で答えた。
京一は軽く息をはいて、

「どうしたの？
元気ないけど…」
「いや松木くんはスゴいなと思って…」
緑はマウンドから投げる松木を見ていた。
「もしかして……松木のことは好きなのか？……」
「んなわけないでしょ！！」
思い切り京一の頭を殴る。
「それくらい元気なほうが緑ちゃんらしいよ」
京一は殴られた場所を擦りながら言う。
「んじゃ～ドンドン投げ込んでよ」
そう言ってさっきの位置に戻って行った。
緑は球を握ってグラブに自分のグラブに投げる。
「よし行くよ～」
「ヨッシャ！」
それを遠くから見つめている山田。
「アイツもこれでＯＫだな」
八田は外野で守備をしていた。

ポロッ
パス
ポロッ
ポロッ

エラーばかりでレギュラーとして使えるもんじゃない守備力ではない。
守備をしている時に山田は八田にペッタンコで見るからに使いにくいグラブを渡した。

「八田～今日から守備はこのグラブでやれ！」

「これじゃ球取れないでやすよ」

普段から取れないのに口答えする八田。

「いいから使っとけ！」

そう言ってグラブを渡し太田のところに向かった。

ブンッ
ブンッ

「ハァハァ…」
「気合い入ってるね～」

山田は明るく太田に声をかける。
太田は汗を拭いながら山田を見た。

ニコニコしながら太田に近付く。

「今日から素振りはこれでな！」

赤いバットを片手で太田に渡す。

「これっすか？……ぐぁ！！」

右手でバットを受け取るが、あまりの重さにバットを放してしまう。

「それじゃ～頑張れよ～」

手を振りながら柿崎のところへ歩いて行った。

「嬉しそうだな」

柿崎は満面の笑みを浮かべる山田に言った。

山田は嬉しそうにバットを持ち、打席に向かいながら柿崎に言った。

「今年は甲子園行けるかもな」

「最後の夏だな…」

三年の柿崎と山田は、一か月後に控えた夏の予選に闘志を燃やしていた。

カキン！！

山田が松木から放った打球はグランドを超え、空に消えて行った。

「飛ばし過ぎやろ……」

「派手でやりんす」
「う～わ～スゴッ……」
「オレも…あれくらいやれれば…」
山田は打席で思い出したように言った。
「あっ！！一週間後練習試合あったんだ！」
柿崎を始め、みんなビックリしていた。
山田はグランド全体に聞こえるように大きな声で叫んだ。
「来週土曜日！！東京の大帝都高校と練習試合する！！
大会前最後の試合だ
しっかり調整して行くぞ！！」
おう！！
グランドにはみんなの声が響いた。
「大帝都か……」
京一はマスクをかぶったまま誰にも聞こえないように呟いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6491i/

野球やろうぜ

2010年10月28日04時36分発行